

# 更級日記

菅原孝標女

## 東路の道のはてよりも

東路の道のはてよりも、なほ奥つかたに生ひ出たる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひ始めけることにか、世中に物語といふもののあるを、いかで見ばやと思ひつゝ、徒然なるひるまよひぬなどに、姉、継母などやうの人々の、その物語かの物語、光源氏（源氏物語）のあるやつなど、ところ／＼語るを聞くに、いとゆかしさまされど、我が思ふまゝに、そらにいかでか覚え語らむ。いみじく心もとなき（覚束なき）まゝに、等身（人ひとしき身長の佛像）に薬師佛を作りて、手洗などしてひとま（人の来ぬ間）に密に入りつゝ、京にとくのぼせ給ひて、物語の多くさぶらふなる、あるかぎり見せ給へ、と身を捨てて額をつき（禮拜す）祈り申すほどに、十三になる年のぼらむとて、九月三日かどでして、今立といふ所につつる。

年ごろ遊びなれつる所を、あらはに毀ちちらして立ちさわぎて、日の入際のことすこく霧わたりたるに、車に乗るとうち見やりたれば、ひとまには参りつゝ額をつきし、薬師佛の立ち給へるを、見捨て奉るかなしくて、人知れずうち泣かれぬ。

## 門出したる所は

門出したる所は、めぐり（垣根）などもなくて、かりそめの茅屋の部など

もなし。簾かけ幕など引きたり。南ははるかに野のかた見やらる。東西は海ちかくていとおもしろし。夕霧たち渡りて、いみじうをかしけれ（面白し）ば、朝寝などもせず、かた／＼見つゝ、こゝを立ちなむ事もあはれに悲しきに、おなじ月の十五日、雨かきくらし降るに、境を出でて、下野国（校本に、下野は下総国の誤なるべしとあり）いかたといふ所にとまりぬ。庵なども、浮きぬばかりに雨降りなどすれば、恐しくて寝も寝られず。野中に岡だちたる所に、たゞ木ぞ三つ立てる。その日は、雨にぬれたる物どもほし、国に立ちおくれたる人々待つとて、そこに日を暮しつ。

## 十七日のつとめて立つ

十七日のつとめて立つ。昔下総国に、眞野の長といふ人住みけり。引布を干むら萬むら織らせ、晒させけるが家の跡とて、ふかき川を舟にて渡る。むかしの門の柱のまだ残りたるとて、おほきなる柱川の中に四つ立てり。人々歌よむを聞きて、心のうちに、

朽ちもせぬこの川柱のこらずばむかしのあとをいかで知らまし

その夜は黒戸濱（上総国に在り）といふ所にとまる。片つ方は廣やかなる所の、砂子はる／＼と白きに、松原しげりて、月いみじうあかきに、風の音もいみじう心ほそし。人々をかしがりて、歌よみなどするに、

まどろまじこよひならではいつか見むくろどの濱の秋の夜の月

## その翌朝そこを立ちて

その翌朝そこを立ちて、下総と武蔵の境にて、あすだ川（隅田川の古名）といふ、在五中将（在原業平）の、いざこと問はむと詠みける渡なり。中將の集

には隅田川とあり。かゞみのせ、まつさとの渡の津にとまりて、夜一夜、舟にてかゞ物などわたす。乳母なる人は、男などもなくなして（乳母の夫うせて）、さかひにて子産みたりしかば、離れて別にのぼる。いと恋しければ往かまほしく思ふに、兄なる人（和泉守定義）抱きゐて往きたり。皆人はかりそのの假屋などいへど、風すさまじく引綿（綿を引被ることか）などもしなどしたるに、これは男（乳母の夫）なども添はねば、いと手ばなちにあら／＼しげに、苦といふものを一重うち着きたれば、月のこりなくさし入りたるに、紅の衣うへに著て、うちなやみて臥したる。月影さやうの人にはこよなく透きて、いと白く清げにて珍しと思ひて、かき撫でつゝうち泣くを、いとあはれに見捨てがたく思へど、いそぎ出で別るゝ心地、いと飽かずわりなし。佛に覚えて悲しければ、月の興も覺えず屈じ臥しぬ。つとめて舟に車かき据ゑて渡して、あなたの岸に車ひき立てて、送りに來つる人々、これより皆かへりぬ。のぼるは（都に上る人は）宿などしていき別るゝ程、行くも留るも皆泣きなどす。をさな心地にもあはれに見ゆ。

## 今は武蔵国になりぬ

今は武蔵国になりぬ。殊にをかしき所も見えず。濱も砂子白くなどもなく、こぢのやうにて、紫生ふと聞く野（武蔵野）も、荜菝のみ高く生ひて、馬に乗りて弓もたるすゑ見えぬまで高く生ひ茂りて、中をわけ行くに、たけしはいふ寺あり、遙にいゝさらふといふ所の、廊のあとの礎などあり。「いかなる所ぞ」と問へば、「これは古竹芝といふさがなき国人のありけるを、火焼屋の火たく衛士にさし奉りたりけるに、御前の庭を掃くとして、」などや苦しき目を見るらむ。わが国（武蔵）に七つ三つ作り居ゑたる酒壺に、さしわたしたる直柄の瓢の、南風吹けば北になびき、北風吹けば南になびき、西吹けば東になびき、東吹けば西になびきを見でかくてあるよ」と獨打ちつぶやきけるを、その時帝の御女、いみじうかしづかれ給ふ、只ひとり御簾の際に立ち出で給ひて、柱にかゝりて御覽するに、この男の斯くひとりこつを、いと哀にいかなる瓢のいかに靡くらむ、といみじうゆかしく思されければ、御簾を押しあげて、「あの男

こち寄れ」と召しければ、かしこまりて、勾欄のつらに参りたりければ、「言ひつる事いま二返、我にいひて聞かせよ」と仰せければ、酒壺のこと今ひとかへり申しければ、「我めて往きて見せよ。さいふやうあり」と仰せられければ、かしこく恐しく思ひけれど、さるべきにやありけむ、負ひ奉りて下るに、便なく人追ひて來らむ、と思ひて、その夜、瀬多橋のもとに此宮を居ゑ奉りて、瀬多橋を一間ばかり毀ちて、それを飛びこえて、此宮をかき負ひ奉りて、七日七夜といふに、武蔵国に行き著きにけり。帝、后、御子うせ給ひぬ、と思し惑ひもとの給ふに、「武蔵国の衛士（諸国より召されて内裡を守る武士）の男なむ、いとかうばしきものを頸に引きかけて、飛ぶやうに逃げける」と申し出でて、此男を尋ぬるに、なかりけり。論なくもとの国にこそ行くらめ、と朝廷より使くだりて追ふに、瀬多橋毀れてえ行きやらず。三月といふに、武蔵国に往きて、この男を尋ぬるに、此御子、おほやけの使を召して、「われ、さるべきにやありけむ、この男の家ゆかしくて率て行け、といひしかば、率てきたり。いみじくありよく覺ゆ。この男罪にしうせられば、われは如何にあれど、これも、前の世にこの国に跡をたるべき宿世こそありけめ。はやかへりて、朝廷にこのよしを奏せよ」と仰せられければ、いはむ方なくてのぼりて、帝に、斯くなむありつる、と奏しければ、いふかひなし。その男を罪しても、今はこの宮を取りかへし、都にかへし奉るべきにもあらず。竹芝の男に、生けらむ世のかぎり武蔵国をあづけ取らせて、おほやけ事（租調）もなさせじ。たゞ宮にその国を預け奉らせ給ふ由の宣旨下りにければ、此家を内裏の如く造りて、すませ奉りける家を、宮などうせ給ひにければ、寺になしたるを、竹芝寺といふなり。その宮のうみ給へる子どもは、やがて武蔵といふ姓を得てなむありける。それより後、火焼屋（夜番の爲め衛士の簀を焼き居る舎）に女は居るなり」とかたる。

## 野山荜菝の中を

野山荜菝の中を分くるより外のことなくて、武蔵と相摸との中にふとる川あり。舟にて渡りぬれば、相摸国になりぬ。にしとみといふ所の山、絵よく書き

たらむ屏風を立て並べたらむやうなり。片つ方は、海濱の様も寄返る浪の景色も、いみじくおもしろし。もろこしが原（相模国）といふ所も、砂子のいみじう白きを二三日行く。夏は倭なでしこの濃く薄く、錦をひけるやうになむ咲きたる。これは秋の末なれば見えぬといふに、なほ所々はうちこぼれつゝ、あはれげに咲きわたれり。もろこしが原に倭なでしこの咲きむこそなど、人々をかしがる。

## 足柄山といふは

足柄山といふは、四五日かねて恐しげに暗がりわたり、やう／＼入りたつ麓のほどだに、空の氣色はか／＼しくも見えず、えもいはず茂り渡りて、いと恐しげなり。麓にやどりたるに、月もなく暗き夜の間に惑ふやうなるに、あそび（遊女）三人、何処（いづく）よりともなく出できたり。五十ばかりなる一人、二十ばかりなる十四五なるとあり。庵（いほ）のまへに傘（かさ）をさ／＼せて居ゑたり。男ども火をともして見れば、昔こはだ（古の名妓か）といひけむが孫（まご）といふ。髪いと長く額いとよか／＼りて、色しろくきたなげなくて、さてもありぬべき下仕（したつか）などにもありぬべしなど、人々あはれがるに、聲すべて似るものなく、空にすみのほりてめでたく歌をつたふ。人々いみじうあはれがりて、けぢかくて人々もて興するに、「西国（にしこく）のあそびは、えか／＼らじ」などいふを聞きて、「難波（なにわ）わたりにくらぶれば（今様の一句）」「とめでたく歌ひたり。見る目のいときたなげなきに、聲さへ似る物なく歌ひて、さばかり恐しげなる山中（やまなか）に立ちて行くを、人々あかず思ひて皆泣くを、をさなき心地には、まして此宿（このしゆく）を立たむことさへ飽かずおぼゆ。

まだ暁より足柄を越ゆ。まいて山の中の恐しげなる事はむかたなし。雲は足の下にふまる。山のなから許（こ）の木の下（した）のわづかなるに、葵（あひ）の唯三筋（たださんすぢ）ばかりあるを、世はなれて、かゝる山中（やまなか）にしも生ひ出でけむよ、と人々あはれがる。水は其山（そのやま）に三所（さんしよ）流れたる、辛うじて越え出でて関山（せきさん）にとゞまりぬ。これよりは駿河（しづな）なり。よこばしりの関の傍に岩壺（いわう）といふ所あり。えもいはず大なる石の四方なる中に、穴のあきたる中より出づる水の、清くつめたき事がぎりなし。

## 富士山はこの国なり

富士山（ふじのやま）はこの国なり。わが生ひ出でし国にては、西面に見えし山なり。その山の様、いと世に見えぬさまなり。さまことなる山のすがたの、紺青（こんせい）を塗りたるやうなるに、雪の消ゆる世もなく積りたれば、色濃き衣（あ）に白き袖（そで）（装束（まつぷく）の時用ゆる短き下著（かみ））著たらむやうに見えて、山の巔（いただき）のすこし平ぎたるより煙（けぶり）は立ちのぼる。夕暮（ゆふぐ）は火の燃え立つも見ゆ。

## 富士川といふは

富士川といふは、富士山より落ち来る水なり。その国の人の出でて語るやう、「一歳（ひととせ）ころ物にまかりたりしに、いと暑かりしかば、この水のつらに休みつゝ見れば、川上（かわのうへ）のかたより黄なるもの流れ来て、物につきてとゞまりたるを見れば、反古（まが）なり。とりあげて見れば、黄なる紙にして、濃くうるはしく書かれたり。あやしくて見れば、来年なるべき国どもを、除目（じよめ）（任官（にんくわん）の公事（こうじ））のごと皆かきて、この国来年あぐべき（国守（くにのかみ）の満期（まんき））にも守なして、又そへて二人（国守（くにのかみ）一人、後任者（ごにんしや）一人）をなしたり。怪しあさましと思ひて、とり上げて干してをさめたりしを、かへる年の司召（つかさど）などは、今年この山に、そこばくの神々あつまりて爲い給ふなりけりと見給へし、めづらかなることに侍（まじ）ふ」とかたる。

## 清見が関は

清見が関は、片つ方は海なるに、関屋（せきや）ども数多ありて、海まで柵（さく）したり。煙あふにやあらむ、清見が関の浪も高くなりぬべし。おもしろき事がぎりなし。田子浦（たごうら）は浪たかくて、舟にて漕ぎめぐる。沼尻（ぬまじり）といふ所もすると過ぎて、

大井川といふ渡あり。水の瀬の常ならず、磨粉などを濃くて流したらむやうに、白き水はやく流れたり。

## 沼尻といふ所も

沼尻といふ所もすると過ぎて、いみじく煩ひ出でて遠江にかゝる。小夜中山など越えけむ程も覚えす、いみじく苦しければ、天龍といふ川のつらに、假屋つくり設けたりければ、そこにて日比する程にぞ、やう／＼おこたる(苦しさが)。冬深くなりたれば、河風はげしく吹き上げて、堪へがたく覚えけり。その渡しつゝ瀆名橋に著いたり。瀆名橋くだりし時は、黒木を渡したりし。この度は跡だに見えねば、舟にてわたる。入江に渡せし橋なり。外の海はいと、いみじく荒く、浪高くて、入江のいたづらなる洲どもに、ことものもなく、松原の茂れる中より、浪の寄せかへるも、いろ／＼の玉のやうに見え、實に松の末より浪は越ゆるやうに見えて、いみじくおもしろし。

## それよりかみは

それよりかみは、井の鼻といふ坂の、えもいはず侘しきをのほりぬれば、三河国高師濱といふ。しかすがの渡、實に思ひ煩ひぬべくをか。宮路山といふ所越ゆるほど、十月晦日なるに、紅葉してさかりなり。

嵐こそ吹き来ざりけれみやぢ山まだもみぢ葉の散らでのこれる

二村山の中にとまりたる夜、おほきなる柿の木の下に庵をつくりたれば、夜ひと夜庵のうへに、柿の落ちかゝりたるを、人々拾ひなごす。八橋(杜若の名所)は名のみして、橋のかたもなく何の見所もなし。

## 尾張国鳴海浦を

三河と尾張となる。尾張国鳴海浦を過ぐるに、夕潮たゞみちにみちて、今宵宿からむも、ちうげん(中程)に潮みち来なばこゝをも過ぎじと、あるかぎり走り惑ひ過ぎぬ。

美濃国なる境に、すのまたといふ渡して、野上といふ所につきぬ。そこに遊びども出でて来て、夜ひと夜うたふに、足柄なりしおもひ出でられて、哀に恋しきこと限なし。

雪ふりあれ惑ふに、物の興もなく、不破の関、あつみの山など越えて、近江国おきなかといふ人の家にとどりて、四五日あり。

みつさか山の麓に、よるひる、時雨、霰降りみだれて、日の光もさやかならず、いみじう物むつかし。

そこを立ちて、犬上、神崎、野洲、くる本などいふ所々、何となく過ぎぬ。湖の面はる／＼として、なでしま、竹生島などいふ所々の見えたる、いとおもしろし。瀬多橋、皆くづれて渡りわづらふ。

## 栗津にとどまりて

栗津にとどまりて、十二月二日京に入る。暗く行き著くべしと、申の時ばかりに立ちて行けば、関(逢坂関)ちかくなりて、山づらにかりそめなるきりかけ(板塀に似たるもの)といふ物したる上より、丈六の佛(一丈六尺の佛像)のいまだ荒作におはするが、顔ばかり見やられたり。あはれに人ばなれて、何処ともなくておはする佛かな、と打見やりて過ぎぬ。

こゝらの(数多の)国々を過ぎぬるに、駿河の清見が関と、逢坂関とばかりはなかりけり(風景のよきは)。いと暗くなりて、三條宮の西なる所につきぬ。

## ひろびろとあれたる所の

ひろくとあれたる所の過ぎ来つる山々にもおとらず、おほきに恐れげなる深山木どものやうにて。

## 母なくなりし姪どもも

母なくなりし姪どもも、生れしよりひとつにて、夜は左右に臥し起きするも、あはれに思ひ出でられなごして、心もそらに咏め暮さる。立聞きかいまむ(覗き見る)人のけはひして、いとみじく物つゝまし(恥かし)。十日ばかりありて退出たれば(三條宮より)、父母、炭櫃に火などおこして待ち居たりけり。車より降りたるをうち見て、「おはする時こそ、人めも見え、さぶらひなどもありけれ、この日比は人聲もせず、前に人かげも見えず、いと心ぼそく侘しかりつる。斯くてのみも、まろが身をば如何がせむとかする」とうち泣くを見るもいとかなし。翌朝も、「今日はかくておはすれば、内外人おほく、こよなく賑しくもなりたるかな」とうちいひて對ひ居たるも、いと哀に、何のほひのあるにか、と涙ぐましう聞ゆ。

## ひじりなごすら

高僧などすら、前の世のこと夢に見るは、いと難き事にあるを、いとかう跡はかないやうに、はかしくからぬ心地に見るやう、清水の禮堂に居たれば、別當とおほしき人出で来て、「君は、さきの生に、この御寺の僧にてなむありし。佛師にて、佛をいと多くつくり奉りし功德によりて、ありしすまざりて、人と生れたるなり。これは御堂の東におはする丈六の佛は、その作りたりしなり。箔をおしきして、なくなりしぞ」と。「あないみじ。しからは、あ

れに箔おし奉らむ」といへば、「なくなりししかば、こと人、はくおし奉りて、こと人供養もしてし、と見て後、清水にねんごろに参り仕う奉らましかば、前の世に、その御寺に佛念じ申しけむ力に、おのづから、能うも。

## をこがましく見えしかば

をこがましく見えしかば、我はかくてとち籠りぬべきぞ」とのみ残なげに世を思ひいふめるに、心ぼそき堪へず。東は野のはるくとあるに、東の山際は、比叡山よりして稻荷などいふ山まで、あらはに見えわたり、西は雙岡の松風、いと耳ちかう心ぼそく聞えて、内にはいたゞきのもとまで、田といふものひた(鳴子板)引きならす音など、田舎の心地していとをかしきに、月のあかき夜などはいとおもしろきを、眺めあかし暮すに、知りたりし人、里遠くなりて音もせず。便につけて、「何事があらむ」とつたふる人に驚きて、

おもひ出でて人こそ問はね山里のまがきの荻にあきかぜぞ吹く

といひてやる。

## 十月になりて、京にうつろふ

十月になりて、京にうつろふ。母尼になりて、おなじ家の内なれど、かたとに(別々に)住み離れてあり。父は、唯我を大人にしすゑて、我は世にもいであまじらはず、蔭にかくれたらむやうにて居たるを、見るもたのもしげなく心細く覚ゆるに、聞し召すゆかりある所(祐子内親王)に、何となく徒然に心細くてあらむよりは、と召すを、古代のおやは、宮仕人はいと憂きことなり、と思ひて過ぐさするを、今の世の人は、さのみこそはいでたて、さてもおのづからよき例もあり。さてもこころみよ、といふ人々ありて、しづくに出したてらる。まづ一夜まゐる。菊の濃く薄き八ばかりに、濃き揺練(かさね)をつ

へに著たり。さこそ物語にのみ心を入れて、それを見るより外に、行き通ふるゐ(一類、同族)、親族などに殊になく、こだいの親どもの影ばかりにて、月をも花をも見るより外の事はなきならひに立ちいづるほどの心地、あれにもあらず現とも覚えて、曉にはまかんでぬ。さとびたる心地には、なか／＼定りたる里住よりは、をかしきことをも見聞きて、心も慰みやせむと思ふをりをりありしを、いとはしたなくて(手持無沙汰にて)悲しかるべき事にこそあるべかんめれ、と思へどいかゞせむ。十二月になりて又まゐる。同じ此度は日比さぶらふ。うへには、時々夜々ものほりて、知らぬ人の中にうち臥して、つゆ(少しも)まどるまれば。恥しう物のつゝまじきまゝに、忍びてうち泣かれつゝ、曉には夜ぶかくおりて、日くらしして、この老い衰へて、我を子としも頼しからむかけのやうに、おもひ頼みむかひ居たるに、恋しく覚束なくのみ覚ゆ。

## 如何によしなかりける心なり

くちをし。如何によしなかりける心なり、と思ひしみ果てて、まめ／＼しくすぐすとならば、さてもありはず、まゐり初めし所にも、かくかき籠りぬるを、實とも思しめしたらぬ様に、人々もつゆ絶えず召しなどする中にも、わざと召して、「わかひ人參らせよ」と仰くだれば、えさらず(已むを得ず)出したつるにひかされて、また時々出でたてど、過ぎにし方のやつなる、あいなのだのみ(甲斐なき憑み)の心おこりをだに、すべき様もなくて、さすがに若い人にひかれて、をり／＼さし出づるにも、馴れたる人は、こよなく何事につけてもありつき顔に、我はいと若人にあるべきにもあらず、また大人にせらるべき覚もなく、時々客人にさしはなたれて、すゞるなる様なれど、ひとへにそなた一つを頼むべきならねば、我よりまさる人あるも、羨しくもあらず。なか／＼心やすく覚えて、さるべき折節まゐりて、つれづれ慰むべき人と物語などして、めでたき事ども、をかしく面白きをり／＼も、我が身はかやうに立ち交り、いたく人にも見知られむにも、憚りあるべければ、たゞ大方の事にも聞きつゝすぐすに、内の御供(参内の御供)に参りたる折、有明の月いとあかきに、我が念し申す天照大神は、内にぞおはしますなるかし。かゝる折に

参りて、拜み奉らむと思ひて、四月ばかりの月のあかきに、いと忍びて参りたれば、はかせの命婦は、しる便あれば、燈籠の火のいとほのかなるに、あさましくおい神さびて、さすがにいとよう物など言ひ居たるが、人ともおほえず、神のあらはれ給へるかと覚ゆ。

またの夜も、月のいとあかきに、藤壺の東の戸を押しあけて、さべき人々物がたりしつゝ、月をながむるに、梅壺の女御(藤原生子、内大臣教通の女)のほらせ給ふなるおとなひ、いみじく心にくゝ優なるにも、「故宮(長曆三年につせし中宮源のおはします世ならましかば、斯様にのほらせ給はましや」など、人々言ひ出づる、實にいとあはれなりかし。

天の戸を雪井ながらもよそに見てむかしのあとを恋ふる月かな

## 冬になりて

冬になりて、月なく雪も降らずながら、星の光に空さすがに隈なく、さえ渡りたる夜のかぎり、殿の御方にさぶらふ人々と物語し明しつゝ、明くれば

## たちやあらまし

たちやあらまし(誤脱あらんか)。いといふ效なくまつで仕まつ事もなくて止みにき。

## 十二月二十五日

十二月二十五日、宮の御佛名に召しあれば、その夜ばかりと思ひて参りぬ。しるぎ衣どもに、濃き掻練を皆著て、四十餘人ばかり出で居たり。しるべし出

でし人の、かげに隠れて、あるが中に、うちほのめいて、曉にはまかつ。雪うち散りて、いみじく烈しく冴えこぼる曉方の月のほのかに、濃き揺練の袖にうつれるも、實にぬるゝがほなり。道すがら、

年はくれ夜はあげがたの月かげの袖にうつれるほどぞはかなき

## かう立ち出でぬとならば

かう立ち出でぬとならば、さても宮仕の方にもたち馴れ、世にまぎれたるも、ねぢけがましき覚もなき程は、おのづから人のやうにもおぼし、もてなさせ給ふ様にもあらず。親だちもいと心得ず、ほどもなくこめす多つ。さりとしてその有様の、忽にきら／＼しき勢など、あ／＼い様(あるべき様)もなく、いとよしかりけるすゞる心にてても、殊の外に違ひぬる有様なりかし。

いく千たび水の田芹をつみしかと思ひしことにつゆもかなはぬ  
と許ひとりこたれて止めぬ。

## その後は何となくまぎらはしきに

その後は、何となくまぎらはしきに、物語のことも、うち絶え忘られて、物まめやかなるさまに心もなりはててぞ、などで多くの年月を、いたつらにて臥し起きしに、行をも物詣をもせざりけむ。このあらずし事とても思ひし事どもは、この世にあんべかりける事どもなりや。

光源氏ばかりの人は、この世におはしけるやは、薰大将の宇治に隠しすゑ給ふべくもなき世なり。あな物狂ほしや、

## 物語を僅にしても

国にて物語を僅にしても、はか／＼しく人の様ならむとも念ぜられず。このごろの世の人は、十七八よりこそ経よみ行をもすれ。さること思ひがけられず、辛うじて思ひよる事は、いみじくやむことなく、形有様、物語にある光源氏などやうにもおはせむ人を、年に一度にても通はし奉りて、浮舟の女君のやうに、山里にかくし居ゑられて、花、紅葉、月、雪をながめて、いと心細げにて、めでたからむ御文などを、時々待ち見などこそせめと許思ひつゞけ、あらずしこと(豫想)にも覚えけり。

## 親となりなば

親となりなば(自ら母親となりなば)、いみじうやむことなく、我が身もなりなむなど、たゞ行くへなき事を、打ちおもひすぐすに、親、からうじて遙にとほき東になりて、「年比はいつしか思ふやうに、ちかき所にをりたらば、まつ胸あくばかり傳きたてて、率てくだりて、海山の景色も見せ、それをばさるものにて、我が身よりも高つもてなし傳きて見むとこそ思ひつれ。われも人も、宿世のつたなかりければ、あり／＼て(年月を経て)かく遙なる国になりたり。幼かりし時、東の国にゐて下りてだに、心地もいさ／＼かあしければ、これをや此国に見捨てて、惑はむとすらむと思ふ。人の国の恐しきにつけても、我が身ひとつならば、やすらかならましを、所狭くひきぐして、いはまほしき事もえ言はず、せまほしき事もえせずなどあるが、侘しうもある哉、と心をくだきしに、今は、まいて大人になりたるを率てくだりて、わが命も知らず、京の中にてさすらへむは例の事。あづまの国、田舎人になりて惑はむは、いみじかるべし。京とても、たのもしう迎へ取りてむと思ふ類親族もなし。さりとして、わづかになりたる国(辛うじて得たる国守の官)を辭し申すべきにもあらねば、京にとゞめて、ながき別にて止めぬべきなり。京にもさるべき様にもたなして、とゞめむとは思ひよる事にもあらず」と夜晝なげかるゝを聞く心地、

花紅葉のおもひも皆忘れて、悲しくいみじく思ひなげかるれど、いかゞはせむ。  
七月十三日（みづみづ）にくだる。五日、かねては見むもなか／＼なるべければ、うちにもいらす。まいてその日は立ちさわぎて時なりぬれば、今はとて簾をひきあげてうち見合せて、涙をほろ／＼と落して、やがて出でぬるを見送る心地、目もくれ惑ひて、やがて臥されぬるに、とまる男のおくりしてかへるに、（懐紙に）思ふことこのころにかなふ身なりせば秋のわかれをふかく知らまし

と許かゝれたるを、見えやらねず、ことよろしき時こそ、腰をれかゝりたる事（腰折歌）も思ひつづけらるね。ともかくも言ふべき方もおぼえぬまゝに、

かけてこそ思はざりしかこの世にてしばしも君にわかるべしとは

とや書かれにけむ。いと人目も見えず、淋しく心細くうち眺めつゝ、いづこばかりと明暮思ひやる。道の程も知りにはしかば、はるかに恋しく、心ほそき事がざりなし。明くるより暮るゝまで、東の山際を詠めて過す。

## 八月ばかりに太秦に籠るに

八月（はし）ばかりに太秦（廣隆寺）に籠るに、一條より詣づる道に、（男車）男の乗りし車（二つ）ばかり引き立てて物へ行くに、諸共にくべき人待つなるべし、過ぎて行くに、隨身だつものをおこせて、

花見にゆくときみを見るかな

といはせられたれば、「斯る程のことは、いらへぬも便なし」などあれば、

千種なるころならひに秋の野の

と許いはせていき過ぎぬ。七日さぶらぶ程も、たゞ東路のみ思ひやられてよしなし。とかくして、離れてたひらかにあひ見せ給へと申せば、佛もあはれと聞き入れさせ給ひけむかし。冬になりて、日ぐらし雨ふりくらいたる夜、雲かへる風烈しううち吹きて、空晴れて、月いみじうあかつなりて、軒ちかき萩の、

いみじく風にふかれて碎けまどふがいと哀にて、秋をいかにおもひ出づらむ冬ふかみあらしにまどふ萩の枯葉も

## 東より人きたる

東より人きたる。

神拝（国中の神社に国守の参詣すること）といふわざして、国の中ありきしに、水をかしく流れたる野のはる／＼とあるに、森のあるをかしき所かな、みせて、と先思ひ出でて、こゝは何処とかいふ、と問へば、子忍（こしの）の森となむ申す、と答へたりしが、身によそへられて、いみじく悲しかりしかば、馬よりおりて、そこに一時なむながめられし。

とどめおきて我がこと物や思ひけむ見るに悲しきこしのびの森

となむ覚えし。

とあるを、見る心地いへば更なり。返事に、

こしのびを聞くにつけてもとどめおきし秩父の山のつらき東路

## かうで徒然とながむるに

かうで徒然とながむるに、など物まつでもせざりけむ。母いみじかりし古代の人にて、「初瀬にはあなおそろし、奈良坂にて人にとられなば如何せむ。石山、関山越えていとおそろし。鞍馬は、さる山めて出でむいとおそろしや。親のぼりて兎も角も」と、さはなちたる人のやうに煩はしがりて、僅に清水にゐて籠りたり。それにも例のくせは、まことしかへい事もおもひ申されず、彼岸のほどにて、いみじう騒しう、おそろしきまで覚えて、うちまどるみ入りに、御帳（なまづ）のかたの大防（いぬのま）（佛壇の前なる格子）の中に、あをき織物の衣を着て、錦を頭にもかつき、足にもはいたる僧の別當とおぼしきが寄り来て、行先



のあはれならむも知らず。さもよしなし事をのみとつちむづかりて、御帳の内に入りぬと見ても、うち驚きても、かくなむ見えつるとも語らず、心に思ひとめてまかでぬ。

## 幅一尺の鏡を鑄させて

幅一尺の鏡を鑄させて、え率て參らせぬかはりにとて、僧をいだしたてて、初瀬に詣でさすめり。三日さぶらひて、この人(孝標の女をさす)のあんべからむ様(未来の有様)、夢に見せ給へなどいひて、詣でさするなとめり。そのほどは精進せさす。この僧かへりて、「夢をだに見てまかでなむが、本意なき事、いかと歸りても申すべきといみじう額つき行ひて、寝たりしかば、御帳の方よりいみじうけだかう清げにおはする女の、麗しうさうぞき給へるが、奉りし鏡をひきさげて、「この鏡には、文やそひたりし」と問ひ給へば、かしまりて、「文もさぶらはざりき。この鏡をなむ奉れと侍りし」と答へ奉れば、「あやしかりける事かな。文そふべきものを」とて、「この鏡を、こなたに移れる影を見よ。これを見れば、あはれに悲しきぞ」とて、さめくと泣き給ふを見れば、ふしまろび泣き歎きたる影うつれり。『この影を見れば、いみじうかなしな。これ見よ』とて、今かたつ方に移れる影を見せ給へば、御簾ども青やかに、几帳おし出でたる下より、いろ／＼の衣こぼれ出でて、梅櫻咲きたるに、鶯木づたひ鳴きたるを見せて、『これを見るは嬉し』など、宣ふとなむ見えし」と語るなり。いかに見えけるぞとだに耳もととめず、ものはかなき心にもつねに天照大神を念じ申せといふ人あり。いづくにおはします神佛には、なご、さはいへど、やう／＼思ひわかれて、人に問へば、「神におはします。伊勢におはします。紀の国に、きのこくそうと申すは、この御神なり。さては内侍所に皇神となむおはします」といふ。伊勢国までは、思ひかくべきにもあらざんなり。内侍所にもいかでかは参り拜み奉らむ。空の光を念じ申すべきにこそはなど、うきて覚ゆ。親族なる人尼になりて、修學院に入りぬるに、冬の比、

なみださへ降りは入つつぞ思ひやるあらし吹くらむ冬のやま里

かへし、

わけて問ふ心のほどの見ゆるかな木かげをぐらき夏のしげりを

## 東にくだりし親

東にくだりし親、辛じてのぼりて、西山なる所におちつきたれば、そこに皆渡りて見るに、いみじう嬉しきに、月のあかき夜、ひと夜物語などして、

かかる夜もありけるものを限とてきみにわかれし秋はいかにぞ

といひたれば、いみじく泣きて、

おもふことかなはずなどといとひこし命のほども今ぞつれしき

これぞ別の門出と、言ひ知らせしほどの悲しさよりは、たひらかに待ちつけたる嬉しさも限なけれど、人のうへにても見しに、老い衰へて、世に出でまじらひしは、

## 都の中とも見えぬ所のさまなり

都の中とも見えぬ所のさまなり。ありもつかず、いみじう物騒しけれども、いつしかと思ひし事なれば、「物語もとめて見せよ見せよ」と母を責むれば、三條殿宮に、親族なる人の衛門命婦とて侍ひける、尋ねて文やりたれば、珍しがりて、よろこびて、「御前のをおろしたる(御前にありし草紙を頂戴したり)」とて、わざとめでたき草紙ども、硯の箱の蓋に入れておこせたり。嬉しくいみじくて、夜晝これを見るよりうち初、また／＼も見まほしきに、ありもつかぬ京のほとりに、誰かは物語もとめ見する人のあらむ。

## 継母なりし人は

継母なりし人は、宮仕せしが下りしなれば、思ひしにあらぬ事どもなどありて、世中つらめしげにて、外に渡るとて、五つばかりなる兒どもなどして、「哀なりつる心のほどなむ、忘れむ世あるまじき」などいひて、梅の木うめの軒かま近くて、いと大なるを、「これが花の咲かむ折は、来むよ」と言ひおきて渡りぬるを、心のうち恋しくあはれなり、と思ひつゝ、忍びねをのみ泣きて、その年もかへりぬ（治安元年）。いつしか梅咲かなむ、来むとありしを、さやある（音信やある）、と目をかけて待ちわたるに、花もみな咲きぬれど音もせず、思ひわびて、花を折りてやる。

たのめしをなほや待つべき霜がれし梅をも春はわすれざりけり  
といひやりたれば、哀なる事ども書きて、

なほたのめ梅の立枝たちえはちぎりおかぬ思ひのほかの人も問ふなり

## その春世の中いみじつさわがしうて

その春、世の中いみじつさわがしうて、まつぎとの渡の月影（前に見ゆ）、あはれに見し乳母も、三月朔日（さつきひ）になくなりぬ。せん方なく思ひなげくに、物語のゆかしさも覚えすなりぬ。いみじく泣きくらして見出したれば、夕日のいと花やかにさしたるに、櫻の花のこりなく散りみだる。

散る花もまた来む春は見もやせむやがてわかれし人ぞこひしき

また聞けば、侍従大納言の御女、なくなり給ひぬなり。殿の中將（長家）のおぼしなげくなる様、我が物の悲しき折なれば（乳母に先だたれて）、いみじく哀なりと聞く。のぼりつきたりし時、これ手本にせよとて、この姫君の御手（おんて）を取らせたりしを、小夜ふけて寝ざめざりせば（郭公人傳にこそ聞くべかり）

けれ」拾遺集の歌、など書きて、

鳥部山谷にけぶりの燃えたらばはかなく見えしわれと知らなむ

といひ知らずをかしげに、めでたく書き給へるを見て、いと涙をそへまざる。

## かくのみ思ひ屈じたるを

かくのみ思ひ屈じたるを、心も慰めむと心ぐるしがりて、母、物語などもとめて見せ給ふに、實（げ）におのづから慰みゆく。紫のゆかり（源氏物語）を見つゝ、つゞぎの見まほしく覚ゆれど、人語らひなどもえせず。されどいまだ京（みやこ）なれぬほどにて、え見つけずいみじく心もとなく、ゆかしく覚ゆるまゝに、この源氏物語（げんじものがたり）の巻よりして、みな見せ給へ、と心のうちにいのる。親の大秦（あしな）に籠り給へるにも、こと事なく、此事を申して出でむまゝに、この物語見はてむと思へど見えす。いと口惜しく思ひなげかるゝに、叔母なる人の田舎よりのぼりたる所に渡いたれば、「いと美しうおひなりにけり」など、あはれがり珍しがりて、かへるに、「何をか奉らむ」とて、源氏の五十餘巻、櫃に入りながら、在中將、とほぎみ、せり川、しらゝ、あさつづなどいふ物語ども、一袋とり入れてえて歸る心地の嬉しさぞいみじきや。はしるはしる僅に見つゝ、心もえず、心もとなく思ひ、源氏を一の巻よりして、人も交らず、几帳のうちにうつち臥して、ひき出でつゝ見る心地、後の位も何にかはせむ。晝は日べらし、夜は目の覚めたるかぎり、火を近くともして、これを見るより外の事なければ、おのづから名などはそらにおほえ浮ぶを、いみじき事に思ふに、夢にいと清げなる僧の、黄なる地の袈裟著たるが来て、「法華經五巻（まほ）を疾く習へ」といふと見れど、人にもかたらず、習はむとも思ひかけず、物語のことをのみ心にしめて、我はこの比わろきぞかし（容貌見苦し）。さかりにならば、かたちも限なくよく、髪もいみじく長くなりなむ。光源氏の夕顔、宇治の大將（たいしやう）の浮舟の女君のやうにこそあらめ、と思ひける心、まついとほかなく淺まし。

## 五月朔日

五月朔日ころ、軒のちかき花橘の、いと白く散りたるをながめて、

時ならず降る雪かとぞながめまし花たちはなのかをらざりせば

足柄といひし山の麓に、闇がり渡りたりし木の様に茂れる所なれば、十月ばかりの紅葉、四方の山邊よりも、實にいみじくおもしろく、錦をひける様なるに、外よりきたる人の、「今まぬりつる道に、紅葉のいとおもしろき所のありつる」といふに、ふと、

いづこにもおとらじものを我宿の世をあきはつる氣色ばかりは

## 物語のことを

物語のことを、書は日ぐらし思ひつゞけ、夜も目のさめたるかぎりは、これのみにかけたるに、夢に見るやう、この比、皇太后宮(三條院皇后研子)の一品宮(貞子、陽明門院)の御料に、六角堂に遣水をなむつくる、といふ人あるを、そはいかに、と問へば、天照大神を念じませ、といふと見て、人にもかたらず、何とおもはでやみぬる、いといふかひなし。春ごと、この一品宮をながめやりつゝ、

咲くとまち散りぬとなげく春はただわがやどがほに花を見るかな

三月晦日(土忌)土を忌む日曆にあり(に人のもとに渡りたるに、櫻のさかりに面白く今まで散らぬもあり。かへりて又の日、

あかざりし宿のさくらを春くれて散りがたにしもひとり見しかな

といひにやる。

## 花の咲き散る折毎に

花の咲き散る折毎に、乳母なくなりし折ぞかし、とのみ哀なるに、おなじ折なくなり給ひし、侍従大納言の御女の書を見つゝすゞろに哀なるに、五月ばかり夜ふくるまで、物語を讀みておき居たれば、来つらむ方も見えぬに、猫のいと長つ啼いたるを、驚きて見れば、いみじうをかしげなる猫あり。いづくより来つる猫ぞと見るに、姉なる人、「あなかま(禁止の詞)、人に聞かすな。いとをかしげなる猫なり、かはむ」とあるに、いみじう人馴れつゝ傍にうち臥したり。尋ぬる人やある、とこれを隠してかふに、凡て下衆のあたりにも寄らず、つと前にのみありて、物もきたなげなるは、ほかさまに顔をむけてくはず。姉弟の中に、つとまとはれて、をかしがりうたげなる程に、姉の惱む事あるに、物さわがしくて、この猫を北面にのみあらせて、呼ばねば、かしがましく啼きのゝしれども、猶さるにてこそは、と思ひてあるに、わづらふ姉おどろきて、「こゝろ、猫はこざる」とあるを「など問へば、夢にこの猫の側に来て、「己は、侍従大納言殿の御女のかくなりたるなり。さるべき縁のいさゝかありて、この中の君の、すゞろに哀とおもひ出で給へば、たゞ暫くにあるを、このころ下衆の中において、いみじうわびしき事」といひて、いみじう泣くさまは、あてに(貴く)をかしげなる人と見えて、うち驚きたれば、この猫の聲にてありつるが、いみじく哀なり。その後は、この猫を北面にも出さず、思ひかしく。唯ひとり居たる所に、この猫がむかひ居たれば、掻い撫でつゝ、「侍従大納言の姫君のおはするな。大納言殿に、知らせ奉らばや」と言ひかくれば、顔をうちまもりつゝ、長つ啼くも心の思なし、目のうちつけに、例の猫にはあらず、聞き知り顔にあはれなり。

## 世の中に長恨歌といふ文を

世の中に、長恨歌(白樂天が唐玄宗と楊貴妃との契を作れる詩)といふ文を、物語に書いてある所あなりと聞くに、いみじうゆかしけれど、え言ひよらぬ

に、さるべき便をたづねて、七月七日いひやる。

契りけむむかしの今日のゆかしきに天のかは浪うち出づるかな

(七月七日玄宗帝楊貴妃と長生殿に契る)

かへし、

たちいづる天の河邊のゆかしさにつねはゆゆしき事もわすれぬ

その十三日の夜の月、いみじく隈なくあかきに、皆人も寝たる夜中ばかりに、縁に出で居て、あねなる人、空をつくくとながめて、「只今ゆくへなく飛びうせなば、いかゞ思ふべき」(姉の詞)と問ふに、なまおそろしと思へる氣色を見て、他事にいひなして、笑ひなどして聞けば、かたはらなる所に、先おふ車とまりて、「荻の葉く(女の名なるべし)」と呼ばすれど、答へざんなり。呼びわづらひて、笛をいとをかしく吹きすまして過ぎぬなり。

笛の音のただ秋かぜときこゆるになど荻の葉のそよとこたへぬ

といひたれば、實にとて、

荻の葉の答ふるまでも吹きよらでただに過ぎぬる笛の音ぞうき

斯様に明るるまで詠めあかいて、夜明けてぞ皆人寝ぬる。

## そのかへる年

そのかへる年(治安三年) 四月の夜半ばかりに火の事ありて、大納言殿の姫君と思ひかしづきし猫も焼けぬ。大納言殿の姫君と呼びしかば、聞き知り顔に泣きて、歩み来などせしかば、父なりし人も、「めづらかに哀なることなり。大納言に申さむ」などありし程に、いみじうあはれに口惜しく覺ゆ。ひろびろと物ふかき深山のやうにはありながら、花紅葉のをりは、四方の山邊も何ならぬを見ならひたるに、たとしへなく狭き所の庭の、ほどもなく木などもなきに

いと心憂きに、向ひなる所に、梅の紅梅など咲き亂れて、風につけて薫り来るにつけても、住み馴れし古郷かぎりなく思ひ出でらる。

にほひ来るとなりの風を身にしめてありし軒端の梅ぞこひしき

## その五月の朔日に

その五月の朔日に、あねなる人、子うみてなくなりぬ。よその事だに(他人にても)をさなくよりいみじく哀とおもひ渡るに、まして言はむかたなく、あはれ悲しと思ひなげかる。母などは、皆なくなりたる方にあるに、形見に(姉の)とまりたる、幼き人々を左右にふせたるに、荒れたる板屋の隙より月のもり来て、兒の顔にあたりたるが、いとゆゝしく覺ゆれば、袖をうちおほひて、今一人をもかきよせて思ふぞいみじきや。そのほど過ぎて、親族なる人のもとより、昔の人(うせにし姉)の必ずもとめておこせよ、とありしかば、もとめに、その折は見え出でずなりにしを、今しも人のおこせたるが、あはれに悲しき事とて、かばねたづめるみやといふ物語をおこせたり。まことに哀なるや。返事に、

うづもれぬかばねを何にたづねけむ苔の下には身こそなりぬれ

乳母なりし人、今は何につけてかかな、と泣くくもとありける所にかへり渡るに、

「故郷にかくこそ人はかへりけれあはれ如何なるわかれなりけむ

昔の形見には、いかでとなむ思ふ」など書きて、「硯の水のこほれば、皆とぢられて、とゞめつ」と言ひたるに、

かき流すあとはつららにとちてけり何を忘れぬかたみとか見む

といひやりたる返事に、

なくさむるかたもなきさの濱千鳥何かうき世にあともとどめむ

この乳母、墓所見て泣く／＼歸りたりし。のぼりけむ野邊は烟もなかりけりいづこをはか(賞、墓所)と尋ねてか見しこれを聞きて、継母なりし人、

そこはかと知りて行かねどさきにたつ涙ぞ道のしるべなりける

かばねたづぬるみや、おこせたりし人、

すみ馴れぬ野邊の笹原あとはかも泣く泣くいかに尋ね侘びけむ

これを見て、兄(定義朝臣)は、その夜おくりに行きたりしかば、

見しままに燃えしけぶりの盡きにしをいかが尋ねし野邊の笹原

雪の日を経て降るころ、吉野山に住む尼君を思ひやる。

雪ふりてまれの人めも絶えぬらむよし野の山のみねのかけみち

## かへる年正月の司召に

かへる年(萬壽二年) 正月の司召に、親のよろこびすべき事ありしに、かひなき翌朝、おなじ心におもふべき人(父の事を思ふ人)の許より、「さりとともと思ひつゝ、明くるを待ちける心もとなさ」といひて、

明くる待つ鐘のこゑにも夢さめて秋のもも夜のこちせしかな

といひたる返事に、

あかつきをなかに待ちけむ思ふ事なるとも聞かぬかねの音ゆゑ

## 四月晦日がた

四月晦日がた、さるべき故ありて、東山なる所へうつろふ。道のほど、田の

苗代、水まかせたるも植ゑたるも、何となく青み、をかしう見えわたりたる山のかげくらう、前ちかく見えて、心細くぞあはれなる。ゆぶくれ水鶏いみじくなく、

たたくともたれか水鶏のくれぬるに山路を深くたづねては来む

靈山ちかき所なれば、詣でて拝み奉るに、いと苦しければ、山寺なる石井によりて、手にむすびつゝ飲みて、「此水のあかず覚ゆるかな」といふ人のあるに、

おく山の石間の水をむすびあげて飽かぬものとは今のみや知る

といひたれば、水飲む人、

山の井のしづくににぐる水よりもこはなほあかぬ心地こそすれ

歸りて、夕日げざやかにさしたるに、京のかたも残りなく見やらるゝに、この乗に濁る人は、京にかへるとて、心苦しげに思ひて、又つとめて、

山の端に入る日のかけは入りはてて心ぼそくぞながめやられし

念佛する僧の、曉にぬかづく音のたふとく聞ゆれば、戸を押しあげたれば、ほの／＼明けゆく山際は、こぐらぎ梢ともきりわたりて、花紅葉のさかりよりも、何となく茂りわたれる、空のけしき曇らはしくをかしきに、杜鵑の聲いと近き梢にあまたゝび啼いたり。

誰に見せたれに聞かせむ山里のこのあかつきもをちかへる音も

(杜鵑の往き返り鳴く音)

この晦日の日、谷のかたなる木のうへに、杜鵑かしがましく啼いたり。

都には待つらむものをほととぎす今日ひねもすに鳴きくらす哉

などのみ詠めつゝ、もろともにある人(同行の人々)、「只今京にも聞きたらむ人あらむや。かくて眺むらむと思ひおこする人あらむ」といひて、

山ふかくたれかおもひはおこすべき月見る人はおほからめども

といへば、

ふかき夜に月見るをりは知らねどもまづ山里ぞおもひやらるる

曉になりやしぬらむと思ふほどに、山の方より人あまた来るおとす。驚きて見やりたれば、鹿の縁のもとまで来てうち鳴いたる、近づては（鹿の聲の近きは）なつかしからぬものの聲なり。

あきの夜のつま恋ひかぬる鹿の音は遠山にこそ聞くべかりけれ

知りたる人の、近きほどに来てかへりぬと聞くに、

まだ人めしらぬ山邊のまつかぜも音してかへるものこそ聞け

八月はつきになりて、廿餘日はつかあまじの曉方の月はいみじくあはれに、山のかたはこへらく、瀧の音も似るものなくのみ詠められて、

おもひ知る人に見せばや山ざとのあきの夜ふかきありあけの月

## 京にかへり出づるに

京にかへり出づるに、わたりし時は、水ばかり見えし田どもも、みな刈り果ててげり。苗代の水かげばかり見えし田の刈り果つるまでなが居しにけり十月晦日みづのひがたに、あからさまに来て見れば、こへらう茂りし木の葉ども、のこりなく散りみだれて、いみじくあはれげに見え渡りて、心地よげにならざり（さうく）と流るゝ流れし水も、木の葉つづもれて、跡ばかり見ゆ。

水さへにすみ絶えにけり木の葉ちるあらしのやまの心ほそさに

そこなる尼に、「春まで命あらは必ず来む。花さかりはまづ告げよ」などいひて歸りにしを、年かへりて（萬壽二年）二月十餘日ふたつきじゅうあまじなるまで音もせねば、

契りおきし花のさかりをつげぬかな春やまだ来ぬ花やにほはぬ

旅なる所に来て、月のこる竹のもと近くて、風の音に目のみ覚めて、うちとけて寝られぬ比、

竹の葉のそよぐ夜ごとに寝ざめして何ともなきにものぞ悲しき

秋のころ、そこを立ちて、外ほかへうつるひて、その主ぬしに、

いづことも露のあはれはわかれしを淺茅がはらの秋ぞこひしき

## 継母なりし人

継母なりし人、くだりし国の名（上総）を宮にも言はるゝに、こと人かよはして後も、猶その名をいはるゝと聞きて、親の今はあいなきよし、言ひにやらむ、とあるに、

あさくらや今は雲井に聞くものを猶木のまろが名のりをやる

斯様に、そこはかとなき事を思ひつゞく。

## たちわかれくしつゝ

わかれくしつゝまかでしを、思ひ出でければ、

月もなく花も見ざりしふゆの夜のこころにしみて恋しきやなぞ

我もさ思ふことなるを、おなじ心なるもをかしうて、

さえし夜の氷はそでにまだとけて冬の夜ながら音をこそはなけ

御前に臥して聞けば、池の鳥どものよますがら、聲々はぶきをわへ音のするに、目もさめて、

わがごとぞ水のうきねに明しつづは毛の霜をはらひ侘ぶなる

とひとりごちたるを、傍に臥し給へる人、聞きつけて、

まして思へ水のかりねの程だにもうはげの霜をはらひ侘びける

かたらふ人どち、局のへだてなる遣戸をあけ合せて、物語などし暮す日、又

語らふ人の、「うへにもおし給ふを、度々よびおろすに、せちに事あらば如何」とあるに、枯れたる薄のあるにつけて、

冬がれのしののをすき袖たゆみまねきもよせじ風にまかせむ

## 上達部殿上人などに

上達部、殿上人などに對面する人は、定りたるやうなれば、うひくしき

里人は、ありなしをだに知らるべきにもあらぬに、十月朔日ころのいと暗き夜、ふだん経(常に経よむ事)に聲よき人々讀むほどなりとて、そなた近き戸ぐち二人ばかり立ち出でて、来つゝ物語してよりふしてあるに、参りたる人のあるを、にげ入りて、「局なる人々呼びあげなどせむも見るし。さばれ唯をりからこそ、斯くてだに」といふ。今一人のあれば、傍にて聞き居たるに、おとなしく静なるけはひにて物などいふ、口惜しからざんなり。今一人はなど問ひて、世の常のうちつけの、懸想びてなどもいひなせず、世の中のおはれなる事どもなど、細やかにいひ出でて、流石にきびしう引き入る方はふしゝありて、我も人も答へなどするを、まだ知らぬ人のありけるなど珍しがりて、頼にたつべくもあらぬほど、星の光だに見えず暗きに、打ちしぐれつゝ、木葉にかゝる音のをかしきを、「なか／＼に艶にをかしき夜かな。月の隈なくあからむも、はしたなくまばゆかり(恥かし)ぬべかりけり。」春秋の事などいひて、「時にしたかひ見る事には、春霞おもしろく、空ものどかに霞み、月のおもてもいと明もあらず、遠う流るゝやうに見えたるに、琵琶の風香調、ゆるやかに弾きならしたる、いとみじく聞ゆるに、また秋になりて、月いみじうあかきに、空は霧わたりたれど、手にとる許さやかに澄みわたりたるに、風の

音、蟲の聲、とりあつめたる心地するに、箏の琴かきならされたる平調の吹きすまされたるは、何の春(秋の誤か)とおぼゆかし。又さると思へば、冬の夜の空さへ冴えわたり、いみじきに雪のふり積りひかり合ひたるに、筆策のわなゝき出でたるは、春秋も皆忘れぬかし」と言ひつゞけて、「いづれにか(春秋)御心とまると問ふに、秋の夜に心をよせて答へ給ふを、さのみ同じ様にはいはじとて、

あさみどり花もひとつにかすみつおぼろに見ゆる春の夜の月

と答へたれば、かへす／＼うち誦じて、さば秋の夜はおぼし捨てつるなりな。

今宵より後のいのちのももあらばさば春の夜を形見と思はむ

といふに、秋にこゝろをよせたる人、

人はみな春にこゝろをよせつめりわれのみや見むあきの夜の月

とあるに、いみじう興じおもひ煩ひたるけしきにて、「唐土などにも、昔より春秋のさだめは、えし侍らざんなるを、このかう思しわかせ給ひけむ御心ども、思ふにゆゑ侍らむかし。我が心のなびき、その折のあはれともをかしとも思ふ事のある時、やがてその折のけしきも、月も花も、心にそめらるゝにこそあなべかんめれ。春秋を知らせ給ひけむ事のふしなむ、いみじう承らまほしき。冬の夜の月は、昔よりすさまじき物の例にひかれて侍りけるに、又いと寒くなどして、ことに見られざりしを、齋宮(萬壽六年齋宮御装著勅使藏人右兵衛督佐・右兵衛佐・資通)の勅使にてくだりしに、曉にのぼらむとて、日比ふり積みたる雪に、月のいとあかきに、旅の空とさへ思へば、心ほそくおぼゆるに、まかり申し(御暇乞)に参りたれば、よの所にも似ず、思ひなしさへ、け恐しきに、さべき(さるべき)所に召して、圓融院の御代より参りたりける人の、いとみじく神さび、古めいたるけはひのいとよし深く、昔の故事ども言ひいで、うち泣きなどして、よう調べたる琵琶の御琴をさし出でられたりしは、この世の事とも覚えす。夜の明けなむをしう、京のことも思ひ絶えぬばかり、おほえ侍りしよりなむ、冬の夜の雪ふれる夜は思ひ知られて、火桶などを抱きても、必ず出で居てなむ見られ侍る。おまへたちも、必ずさ思すゆゑ

(春をよしと思ふ所以)侍らむかし。さらば、今宵よりは、くらき闇の夜のしぐれうちせむは、また心にしみ侍りなむかし。齋宮の雪の夜におとるべき心地もせずなむ」などいひて別れにし後は、誰と知られじと思ひしを、又の年(長久四年)の八月に、内へいらせ給ふに、夜もすがら殿上にて御遊ありけるに、この人の侍ひけるも知らず。その夜はしもにあかして、細殿の遣戸を押しあけて見出したれば、暁がたの月の、あるかなきかにをかしきを見るに、沓の聲聞えて、讀経などする人もあり。讀経の人は、この遣戸口に立ちとまりて、物などいふに答へたれば、ふと思ひ出でて、「時雨の夜こそ、片時わすれず恋しく侍れ」といふに、ことながう答ふべき程ならねば、

何さまで思ひ出でけむなほざりの木の葉にかけし時雨ばかりを

ともいひやらぬを、人々また来あへば、やがてすべり入りて、その夜さりまかんでにしかば、もろともなりし人尋ねて、返(返歌)したりしなども、後にぞ聞く。ありし時雨のやうならむに、いかで琵琶の音のおほゆるかぎり弾きて聞かせむとなむある、と聞くに、ゆかしくて我もさるべき折を待つに更になし。春比のどやかなる夕つ方、参りたりと聞きて、その夜、もろともなりし人とるざり出づるに、外に人々まあり、内にも例の人々あれば、いでまかんで入りぬ。あの人もさや思ひけむ、しめやかなる夕暮を、推し量りて参りたりけるに、騒しかりければ、まかづめり。

かしまみてなるとの浦にこがれ出づるところはえきや磯のあま入

と許にてやみにけり。あの人柄もいとすくよかに、世の常ならぬ人にて、その人はかの人はなども、尋ね問はで過ぎぬ。

## 今は昔のよしなし心も

今は昔のよしなし心も悔しかりけり、とのみ思ひ知りはて、親の物へ率て参りなどせでやみにしも、もどかしく思ひ出でらるれば、今はひとへに豊なるいきほひになりて、二葉の人(幼き子)をも思ふさまに傳きおふしたて、我が身

もみくらの山に積みあまる許にて、後の世までの事をも思はむと思ひはげめて、十一月の廿日餘、石山にまゐる。雪うち降りつつ道のほどさへをかしきに、逢坂の関を見るにも、昔越えしも冬ぞかしと思ひいでらるるに、その程しむいとあらう(荒く)吹いたり。

逢坂の関のやまが吹くこゑはむかし聞きしにかはらざりけり

関寺のいかめしう造られたるを見るにも、その折、あらづくりの御顔(大佛の)ばかり見られし折思ひ出でられて、年月の過ぎにけるもいと哀なり。打出の濱のほどなど見しにもかはらず、暮れかゝる程にまつで著きて、湯屋にありて御堂に上るに、人聲もせず。山風おそろしう覚えて、行ひさして、うちまどるみたる夢に、「中堂より御かう(佛の来迎か)賜はりぬ。疾くかしこへ告げよ」といふ人あるに、うち驚きたれば、夢なりけり、と思ふに、よき事ならむかしと思ひて行ひあかす。又の日もいみじく雪ふり荒れて、宮にかたらひ聞ゆる人の具し給へると物語して、心ほそさを慰む、三日さぶらひてまかんでぬ。

## そのかへる年の十月廿五日

そのかへる年の十月廿五日、大嘗會の御禊とのゝしるに、初瀬の精進はじめで、その日京を出づるに、さるべき人々、「一代に一度の見物にて、田舎世界の人だに見るものを、月日おほかり。その日しも、京をふり出でて往かむも、いと物ぐるほしく、ながれての(後世の)物語ともなりぬべき事なり」など、兄弟なる人はいひ腹立てど、兒どもの親なる人は、いかにいかに、心にこそあらめとて、いふに隨ひて、出したつる心ばへもあはれなり。ともに行く人々も、いとみじく物ゆかしげなるはいとほしけれど、物見て何にかはせむ。斯る折にまつでむ志をさりともし覚しなむ。かならず佛の御驗を見むと思ひ立ちて、その曉に京と出づるに、二條の大路をしも渡りて往くに、先にみあかし(燈明)もたせ、供の人々淨衣姿なるを、そこら棧敷どもに移るとて、いきちがふ馬も車もかち人もあれば、なぞ事やすからず言ひ驚き、あざみ笑ひあざける者どももあり。良頼の兵衛督と申し、人の家のまへを過ぐれば、それ棧敷へわたり給



ふなるべし。門ひろうおし開けて、人々立てるが、「あれは物まつで人ななめりな。月日しもこそ世に多かめれ」と笑ふ中に、いかなる心ある人にか、「一時が目をこやして何にかはせむ。いみじくおぼし立ちて、佛の御徳、かならず見給ふべき人にこそあなめれ。よしなしかし。物見でかうこそ思ひたつべかりけれ」とまめやかにいふ人ひとりぞある。道、顯證ならぬさき(夜のあけぬ中)に、と夜ふかう出でしかば、立ち後れたる人々も待ち、いとおそろしう深き霧をも少しはるけむとて、法性寺の大門にたち止りたるに、田舎より物見にのぼる者どもの、水の流るゝやうにぞ見ゆるや。すべて道もさりあへず、物の心知りげもなきあやしの童(賤しき童兒)まで、ひきよけて行き過ぐるを、車を驚きあざみたる事限なし。これらを見るに、實にいかに出で立ちし道なりともと覚ゆれど、ひたぶるに佛を念じ奉りて、宇治のわたりにいき著きぬ。そこにも猶しも、此方さまに渡りする者ども立ちこえたれば、舟の櫂とりたる男ども、船をまつ人の数も知らぬに、心おこりしたる氣色にて、袖をかいまくりて、顔にあてて棹に押しかりて、頓に舟も寄せず、うそぶいて見まはし、いといみじうすみたる(沈着なる)様なり。むこに(いつまで)え渡らで、つくぐと見るに、紫の物語(源氏物語)に、宇治宮のむすめどもの事あるを、いかなる所なれば、そこにも住ませたるならむ、とゆかしく思ひし所ぞかし。實にをかき所かな、と思ひつゝ、辛うじて渡りて、殿のさぶらふ所の、宇治殿を入りて見るにも、浮舟の女君の、かゝる所にやありけむなど、まじ思ひ出でらる。夜ふかく出でしかば、人々困じてや、ひろうちといふ所にとまりて、物食ひなどする程にしも、供なるものども、「高名の栗駒山(源氏物語権が本にあり、大和物語に「くりこまの山に朝たつ雉よりも云々」とあり)にはあらずや。日も暮方になりぬめり。ぬしたち、調度とりおはさうせよ」と言ふを、いと物おそろしう聞く。その山越え果てて、にへの池の邊へ行き著きたる程、日は山の端にかゝりにたり。いまは宿とれて(と)とれとて(か)、人々あかれて(分れて)宿もとむる。「所はしたにて、いとあやしげなる下種の小なむある」といふに、如何はせむとて、そこに宿りぬ。みな人々京にまかりぬとて、あやしの男二人ぞ居たる。その夜もいも寝ず。此男のいで入りしありくを、奥の方なる女ども、「など斯くしありかるゝぞ」と問ふなれば、「いなや、心も知らぬ人を宿し奉りて、釜はしもひきぬかれ(盗まれ)なば、如何にすべきぞと思ひて、え寝てまはりありくぞかし」と寝たると思ひていふ。聞くに、いとむくく

しく(厭はしく)をか。翌朝、そこを立ちて、東大寺によりて拝み奉る。いそのかみも誠にふりにける事想ひやられて、無下に荒れ果てにけり。その夜、山邊といふ所の寺にやどりて、いと苦しけれど、経すこし讀み奉りてうちやすみたる夢に、いみじくやむごとく清らなる女のおはするに参りたれば、風いみじう吹く。見つけてうち笑みて、「何しにおはしつるぞ」と問ひ給へば、「いかでかは参らざらむ」と申せば、「其処はうちこそ(禁中で)あらむとすね。はかせの命婦をこそよく語らばめ。」と言ふと思ひて、嬉しくたのもしくて、いよ(念じ奉りて、初瀬川などうち過ぎて、その夜御寺(初瀬寺)にまうで著きぬ。被などしてのぼる。三日さぶらひて、曉まかてむとて打ちねぶりたるよさり、御堂のかたより、「すは稻荷よりたまはるしの杉(稻荷山)の杉を尋ね来てあまねく人のかざす今日かな」顯仲の詠(よ)とて、物を投げ出づるやうにするに、うち驚きたれば夢なりけり。曉夜ふかく出でてえとまらねば、奈良坂のこなたなる家を尋ねて宿りぬ。これもいみじげなる小ななり。「こはけしきある所ななめり。ゆめ寝ぬな、靈怪の事あらむに、あなかし、おびえさわがせ給ふな、息もせで臥させ給へ」といふを聞くにも、いといみじう、倦しくおそろしうて、夜を明すほど、千歳を過す心地す。辛うじて明けたつほどに見れば、盗人の家なり。「あるじの女、けしきある事(寝をまちて盗まむ氣色)をしてなむありける」といふ。いみじう風の吹く日、宇治のわたりを過ぐるに、網代いと近うこぎよりたり。

音にのみ聞きわたり来し宇治川のあじろの浪もけふぞかぞふる

### 一三年、四五年へだてたる事を

一三年、四五年へだてたる事を次第もなく書きつゞければ、やがてつゞきたちたる修行者めきたれど、さにはあらず。年月へだたれる事なり。春ごろ鞍馬に籠りたり。山際かすみわたり長閑なるに、山の方より僅にとこる(野生の菴積)など掘りもて来るもをか。出づる道は、花も皆散り果てにければ、何ともなきを、十月ばかりにまうづるに、道のほど山の氣色、この比はいみじうぞ

勝るものなりける。山の端、錦をひろげたるやうなり。たぎりて流れゆく水、水晶をちらす様にわきかへるなど、いづれにも勝れたり。まうで著きて、僧坊にいき著きたるほど、かきしぐれたる紅葉の、たぐひなくぞ見ゆるや。

おく山の紅葉のにしき外よりも如何にしぐれてふかくそめけむ

とぞ見やらるゝ、二年ばかりありて、また石山に籠りたれば、夜もすがら雨ぞいみじく降る。旅居は雨いとむづかしきものと聞きて、蓐を押しあげて見れば、有明の月、谷の底さへ曇りなく澄みわたり、雨と聞えつるは、木の根より水の流るゝ音なり。

たに川のながれはあめと聞ゆれどほかよりけなるありあけの月

## また初瀬にまうづれば

また初瀬にまうづれば、初にこよなく物たのもし。処々にまうづけ（饗應）なとして行きもやらず。山城国、柞の杜などに、紅葉いとをかしき程なり。初瀬川わたるに、

初瀬川立ちかへりつたづぬれば杉のしるしもこのたびや見む

と思ふもいとたのもし。三田さぶらひて罷でぬれば、例の奈良坂のこなたに、小家などに、此度はいと類ひろければ（仲間大勢なれば）、え宿るまじつて、野中にかりそめに庵つくりて居ゑたれば、人はたゞ野に居て夜をあかす。草のうへに行勝などをうち敷きて、うへに蓐を敷きて、いとほかなくて夜を明す。頭もしとゞに露おく。暁方の月のいとみじく澄みわたりてよに知らずをかし。

ゆくへなき旅のそらにもおくれぬは都にて見しありあけの月

何事も心かなはぬ事もなきまゝに、かやうに立ち離れたる物語をしても、道のほどををかしとも苦しとも見るに、おのづから心も慰め、さりとたものもしう、さしあたりて歎かしなご覚ゆる事どもないまゝに、唯をさなき人々を、い

つしか思ふ様にしたてて見むと思ふに、年月の過ぎ行くを心もとなく、たのむ人（夫の君）だに人のやうなる喜しては、とのみ思ひわたる心地たのもしかし。

## 古いみじうかたらひ

古いみじうかたらひ、夜書歌などよみかほしさぶらふ人のありありても、いと昔のやうにこそあらね、絶えずいひわたる。越前守のよめにて下りしが、書き絶え音もせぬに、辛うじてたより尋ねて、これより（孝標の女の方より）、

たえざりし思ひもいまは絶えにけり越のわたりの雪のふかさに

といひたる返事に、

白山のゆきのしたなるさざれ石（小石）の中のおもひは消えむものは

三月の朔日ごろに、西山の奥なる所にいきたる、人目も見えず、のどくと霞みわたりたるに、あはれに心細く、花ばかり咲きみだれたり。

里とほみあまりおくなるやま路には花見にとても人來ざりけり

世中むづかしう覚ゆるころ、太秦にこもりたるに、宮にかたらひ聞ゆる人の御許より文ある。返事聞ゆるほどに、鐘の音の聞ゆれば、

しげかりしうき世のことも忘れず人相の鐘のこころほそさに

と書きて遣りし。

## うら／＼とのどかなる宮にて

うら／＼とのどかなる宮にて、おなじ心なる人三人ばかり、物語などして罷出て、又の日つれ／＼なるまゝに、恋しう思ひ出でらるれば、二人が中に、

袖ぬるるあらいそ波と知りながらともにかづき（水中に泳ぎ入ること）をせしぞ恋しき

と聞えたれば、

あら磯はあされど何のかひなくてうしほに濕るるあまの袖かな

いま一人、

みるめ生ふる浦にあらずば荒磯のなみまかぞふる蟹もあらじを

おなじ心に斯様にいひかはし、世中の憂きも辛きもをかしきも、互かたみに言ひかたらふ人、筑前にくだりて後、月のいみじう明きに、かやうなりし夜、宮にまゐりて、あひては露まどるまず、眺めあかしものを、恋しく思ひつゝ寝入りにけり。宮にまゐりあひて、現にありし様にてありと見てうち驚きたれば、夢なりけり。月も山の端近うなりにけり。さめざらましを（思ひつゝぬればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを）小町の歌（と）いと詠められて、

夢さめて寝ざめのとこのうくばかり恋ひきと告げよ西へゆく月

## なをべきやうめりて

さるべきやうありて、秋ごろ和泉にくだるに、淀といふよりして、道のほどの、をかしうあはれなる事言ひ盡すべうもあらず。高濱といふ所にとゞまりたる夜、いと闇きに夜いたう更けて、舟の櫂の音聞ゆとふなれば、遊女あそびのきたるなりけり。人々興じて、舟にさしつけさせたり。とほき火の光に、單衣ひとへの袖ながやかに、扇さしかくして歌うたひたる、いとあはれに見ゆ。又の日、山の端に日のかゝるほど、住吉の浦を過ぐ。空もひとつに霧りわたれる、松の梢も海のおもても、波の寄せくる渚のほども、絵に書きても、及ぶべき方なうおもしろし。

いかにいひ何にたとへてかたらし秋のゆふべのすみよしの浦

と見つゝ、綱手ひき過ぐるほど、顧みのみせられて飽かず覚ゆ。冬になりてのぼるに、大江といふ浦に、舟に乗りたるに、その夜雨風、岩も動くばかり降りぶきて、神（雷）さへなりて轟くに、浪の立ち来る音なひ、風の吹き惑ひたるさま、恐しげなること命かぎりつと思ひまどはる。岡のうへに、舟を引きあげて夜をあかす。雨はやみたれど、風なほ吹きて舟いださず。ゆくへもなき岡のうへに、五六日を過す。辛うじて風いさゝかやみたる程、舟の簾巻きあげて見渡せば、夕潮たゞみちに満ちくるさまとりもあへず、入江の田鶴の聲をしまぬも、をかしく見ゆ。国の人々あつまり来て、「その夜この浦を出でさせ給ひて、石津に著かせ給へらましかば、やがてこの御舟なごりなくなり（難船して）なまし」などいふ。心ほそ聞ゆ。

荒るる海に風よりさきに舟出していしづの浪と消えなましかば

## 世中にとにかくに

世中に、とにかくに心のみ盡すに、宮仕とて、ことばひとすぢに、仕つ奉りつゝかばや、いかゞあらむ。時々立ち出でば、何なるべくもなかなめり。年はやゝさだ過ぎ（女の盛を過ぎ）行くに、わかゞしき様なるも、つきなつ覚えなげかるゝうちに、身の病いと重くなりて、心にまかせて物語などせし事も、得せずなりたれば、わくらば（たまぐ）の立ち出でも絶えて、長らふべき心地もせぬまゝに、幼き人々を、いかにも、我があらむ世に見おく事もがな、とふしおき思ひなげき、頼む人のよろこびの程を、心もとなく待ち歎かるゝに、秋になりて（天喜五年の秋になりて）待ちいでたる様なれど、思ひしにはあらず、いと本意なく口惜し。親のをりより立ち歸りつゝ見し東路よりは、近きやうに聞ゆれば、いかゞはせむにて、程もなく下るべき事ども急ぐに、門出は、女むすめなる人のあたらしく渡りたる所に、八月十餘日にす。後の事は知らず、そのほどの有様は物さわがしきまで、人おほくいきほひたり。

廿七日にくだるに、男おとこなる（仲俊）は添ひて下る。紅くれないのうちたるに、萩のあを（萩の襖）、紫苑の織物の指貫着て、太刀佩きて、しりに立ちてあゆみ出づ

るを、それも（仲俊をさしていふ）織物のあをに、緋色の指貫、狩衣著て、廊のほどにて馬に乗りぬ。のしり満ちてくだりぬる後、こよなう徒然なれど、いといたう遠きほどならずと聞けば、さきく様の、心ほそくなどは覚えであるに、おくりの人々、又の日かへりて、「いみじうきらくしうて下りぬ」などいひて、「この曉に、いみじく大なる人魂の立ちて、京さまへなむ来ぬる」と語れど、供の人などのにこそは、と思ふ。ゆゑしきさまに思ひだによらむやは。今はいかで、このこの若き人々、おとなびさせむと思ふより外の事なきに、かへる年の四月にのほり来て、夏秋も過ぎぬ。九月二十五日よりわづらひ出でて、十月五日（通俊朝臣の卒せられし康平五年）に、夢のやうに見ないて思ふ心地、世中にまた類ある事とおほえす。初瀬に鏡たてまつりしに、伏しまるび泣きたる影の見えむは、これにこそはありけれ。嬉しげなりけむ影は、きし方もなかりき。いま行末はあべいやうもなし。廿三日、はかなくも煙になす（火葬にす）に、去年の秋、いみじくしたて傳かれて、うちそひて下りしを見やりしを、いとくろき衣のうへに、ゆゑしげなる物を著て、車のもとに泣くく歩み出で行くを、見いだしておもひ出づる心地、すべてたとへむ方なきまゝに、やがて夢路に惑ひてぞ思ふに、その人やみにけむかし。昔よりよしなき物語、歌の事をのみ心にしめて、よるひる思ひて行ひをせましかば、いとくゝる夢の世をば見ずもやあらまし。初瀬にてまへの度は、稻荷より賜ふしるしの杉よとて、なげ出でられしを、いでしまゝに稻荷に詣でたらましかば、かゝらずやあらまし。としごろ天照大神を念じ奉れと見ゆる夢は、人の御乳母として内裏わたりにあり、帝、後の御蔭に、かくるべきさまをのみ、夢ときもあはせしかども、その事は、ひとつかなはで止みぬ。たゞ悲しげなりと見し、鏡のかげのみ達はぬ、あはれに心憂し。かうのみ心に物のかなふ方なうて止みぬる人なれば、功德（後生菩提の功德）もつくらずなどしてたゞよぶ。

## わすかに命は

さすがに命は、憂きにも絶えずながらふれど、後の世もおもふに叶はずであらむかしとぞうしろめたきに、頼むことひとつぞありける。天喜三年、十月

十三日の夜の夢に、居たる所の屋のつまの庭に、阿彌陀佛立ち給へり。さだかには見え給はず。霧一重へだたれるやうに透きて見え給ふを、せめてたえまに見奉れば、蓮花の座の土をあがりたる高さ三四尺、佛の御丈六尺ばかりにて、金色にひかりかゞやき給ひて、御手片つ方をばひるげたる様に、いま片つ方はいんを作り（印を結ぶこと）給ひたるを、こと人の目には見つけ奉らず。我一人見奉りて、さすがにいみじくけ恐しければ、簾のもと近くよりてもえ見奉らねば、佛、「さは此度はかへりて、後むかへに来む」と言ふ聲、我が耳ひとつに聞き居て、人はえ聞きつけずと見るに、うち驚きたれば、十四日なり。この夢ばかりぞ、後の頼としける。

## いもとなどひと所にて

いもとなどひと所にて朝夕見るに、かうあはれに悲しきことの後は、所々になりなどして、誰も見ゆることかたうあるに、いと闇い夜、六波羅にあんなる甥の来るに、珍しうおほえて、

月も出でてやみにくれたる姨捨に何とてこよひたづね来つらむとぞいはれにける。懇に語らふ人の、かうで後おとづれぬに、

今は世にあらじものとや思ふらむあはれ泣く泣く猶こそはふれ

十月ばかり、月のいみじうあかきを、泣くく眺めて、

ひまもなき涙にくもるころにもあかしと見ゆる月のかげかな

## 年月は過ぎかはり行けど

年月は過ぎかはり行けど、夢のやうなりしほどを思ひ出づれば、心地もまどひ、目もかきくらすやうなれば、その程のことは、又さだかにも覚えす。人々

は皆外ほかにすみあかれて、故郷にひとり、いみじう心ほそく悲しくて、眺めあかし侘びて、久しうおとづれぬ人に、

茂りゆくよもぎが露にそぼちつつ人に問はれぬ音をのみぞ泣く  
尼なる人なり。

世のつねの宿のよもぎに思ひやれそむき果てたる庭のくさむら

更科日記（錯簡未修正版）

武笠 三 校訂（西門蘭溪校本に依拠）

『平安朝日記集』（有朋堂文庫 有朋堂書店 一九二九・一・十五）